

伊坂幸太郎『ゴールデンスランバー』論

福 壽 鈴 美

序論

伊坂幸太郎は二〇〇〇(平成十二)年に『オーデュボンの祈り』(新潮社)で作家デビューをし、以後、『ラッシュライフ』『陽気なギャングが地球を回す』『重力ピエロ』『アヒルと鴨のコインロッカー』『チルドレン』『グラスホッパー』『死神の精度』『魔王』『砂漠』『終末のフール』『陽気なギャングと日常の襲撃』『フィッシュストーリー』『ゴールデンスランバー』『モダンタイムス』『あるキング』『SOSの猿』『オー!ファーマー』『バイバイ、ブラックバード』『マリアビートル』『PK』『夜の国のクーパー』『残り全部バケーション』と二三冊の単行本を刊行している。

本稿で論じる『ゴールデンスランバー』は、二〇〇七(平成十九)年十一月に新潮社より刊行された書下ろし長編小説である。単行本として出版された作品としてはアンソロジーを除いて十四冊目となるが、発表順としては二〇〇六(平成十八)年三月より、『河北新報』を初めとする十三の新聞に連載されていた『オー!ファーマー』が先である。二〇一〇年一〇(平成二二)月には講談社インターナショナルより『REMOTE CONTROL』として英語版が、二〇一〇(平成二二)年十二月には新潮社より文庫版がそれぞれ刊行されている。

二〇一〇(平成二二)年一月には監督中村義洋、主演堺雅人による映画が公開された。作品の題名は「The Beatlesのアルバム」「アビーロード (Abbey Road)」に収録されている楽曲「ゴールデンスランバー (Golden Slumbers)」に由来する。

物語は首相公選制となった近未来の日本の中で他の都市に先駆け「セキュリティポッド」を中心とした「システム」による監視社会となった街、仙台で新首相が凱旋パレードの最中に暗殺されたことに始まる。凱旋パレード当日に友人に呼び出され、「オズワルドにされるぞ」と告げられた青柳雅春は、事件発生後身に覚えのない様々な証拠から「首相暗殺」の犯人とされ、警察から追われる身となる。謂れない罪から逃れる唯一の方法として逃亡を選ぶ青柳雅春と、それに伴って青柳雅春の逃亡に関わる何人かの周辺人物が複数の視点、時系列によって反復法の形式を持って描かれている。

作品の構成としては「第一部 事件のはじまり」から始まり、「第二部 事件の視聴者」、「第三部 事件から二十年後」、「第四部 事件」、「第五部 事件から三ヶ月後」の全五部で形成されている。第一部では樋口晴子の視点に沿った語りで、事件当日の昼から事件発生までの時間が描かれている。第二部は入院中の患者である田中徹の視点に沿い、事件開始直後である「一日目」から「二日目」、青

柳雅春が警察の前に姿を現す直前の「三日目」の早朝までを三つの部分に分け、時系列的に描かれている。第三部は「一介のノンフィクションライター」による調書という形式が採用されており、発生から二十年経った「事件」を後述的に分析している。第四部では青柳雅春、樋口晴子の視点に沿い、それぞれの現在と過去がランダムに語られ、事件の顛末が描かれている。第五部では轟静雄、鎌田昌太、岩崎英二郎、青柳平一、青柳雅春の五人それぞれの視点に沿った語りそれぞれの「事件の三ヶ月後」が語られる。「一介のノンフィクションライター」が書いた調査書の形式を取る第三部を除けば、全体に渡って三人称の語りが採用されている。しかし、三人称でありながら、複数の人物の視点に沿うことで物語における位相が描き出されている。

本稿では、物語の構成要素として作品、ひいては読者に効果をもたらししている『ゴールドスランバー』以前の伊坂作品、そしてナラティブの問題に焦点を当てて考察していく。

第一章 作品成立の背景

『ゴールドスランバー』の題名はThe Beatlesの楽曲「ゴールドスランバー (Golden Slumbers)」に由来しており、作中には「ゴールドスランバー (Golden Slumbers)」を含むThe Beatlesが最後にレコーディングしたアルバム「アビーロード (Abbey Road)」の制作過程のエピソードや楽曲が象徴的に盛り込まれ、物語の軸の一つを成す。また作中の「首相暗殺」は明らかに「ジョン・F・ケネディ大統領暗殺事件」に準えられているが、それと同時に「ジョ

ン・F・ケネディ大統領暗殺事件」は作中世界でも過去に起きた事件として語られる。政治的な問題を土台に、一般人が巻き込まれていく姿が複数の時制と視点によって描かれることで、読者は一つの事象に対して多角的な視線を持つことができる。しかし、この「首相暗殺」や「監視社会」といった事象は作品世界における問題であると同時に、我々読者にとっては現代社会をアイロニカルに描き出したメタファーとして読み解くことができる。

伊坂幸太郎の作品は、過去の作品から最新の作品までを俯瞰すると、それぞれが独立した物語でありながら、同時にそれぞれが相互的作用をもたらしている、ということが特徴としてあげられる。初期作品から最新作に至るまでがそれぞれを補う役割を果たしているのである。特に顕著なものとしては人物や事象、様々なものの名称が作品の垣根を越えて繰り返し登場する。それぞれの作品世界は一見分断されたものでありながら、いくつかのつながりを持つことで、そこに一種の世界(物語空間)が構築される。それによって、作品間に相互作用が生じるのである。

『ゴールドスランバー』は「首相公選制が存在する、現実の日本とは異なる日本」(謝辞)が描かれているが、伊坂幸太郎の作品全体では二〇〇五(平成十七)年に出版された『魔王』において初めてこの設定が採用されている。『魔王』以前の作品では語りや台詞に政治的な話題が盛り込まれることなどはあったが、政治が物語の主軸に置かれたのは『魔王』が初めてであり、そこに登場する「犬養」という政治家はそれ以降の作品にも革命をもたらす政治家の象徴としてたびたび名前が登場する。そのことから『魔王』は伊坂作品に於ける政治的主題を扱う際の土台的作品といえ、『ゴ

ルダンスランバー』では「犬養」こそ登場しないものの、「首相公選制」となった日本を舞台にした、政治的な話題の盛り込まれた物語という点で、少なからずこの流れを受け継いだ作品であると言える。

また、『ゴールデンランバー』に登場する青柳雅春を始めとする大学生時代の友人四人の姿から連想されるのは『魔王』の次に発表された『砂漠』においての主要登場人物である北村、西島、鳥井という男性三人と南、東堂という女性二人の、計五人の大学生の姿である。『砂漠』ではこの五人の大学入学時から共に過ごす四年間、卒業までが描かれている。そこには『ゴールデンランバー』の青柳雅春を始めとする四人が過ぎたであろう大学生活の一遍が窺える。それと同時に、最後の場面では作品全体を通しての語り手である北村が大学という五人の共通のコミュニティを出たあとの、それぞれとの関係性について一抹の不安をよぎらせている姿も描かれている。

①何事にもさめている僕の大学生活が、もしかすると彼らによって、劇的なものにもなるのかもしれない。そんな予感とも期待ともつかない気配を、その時の僕は感じていた。

なんてことは、まるでない。
〔『砂漠』春3〕(傍線論者)

②彼女の屈託のない雰囲気は、心地良かった。安心感すら感じさせる丸い輪郭も可愛らしくて、僕はそこで、一目惚れというものは少し性質が違うけれど、今後、自分がこの店に何度も足を運ぶようになり、そのうちに彼女との距離を少しずつ縮めていき、タイミングこそ分らないが、いずれ彼女との交際をはじめめるのではないかと、自惚れとも、妄想ともつかない予

感を、じわじわと感じていた。つまり恋愛の端緒もしくは萌芽と呼ぶべきものを、抱きつつあった。

なんてことは、まるでない。
〔『砂漠』春11〕(傍線論者)

③そして、その直後、ある予感に襲われた。卒業してからの僕たちのことだ。

四月、働きはじめた僕たちは、「社会」と呼ばれる砂漠の厳しい環境に、予想以上の苦勞を強いられる。砂漠はからからに乾いていて、愚痴や嫌味、諦観や嘆息でまみれ、僕たちはそこで毎日必死にもがき、乗り切り、そして、そのうち馴染んでいくに違いない。

鳥井たちとは最初のうちこそ、定期的に連絡を取るけど、だんだんと自分たちの抱える仕事や生活に手一杯で、次第に音信不通になるだろう。

僕は、遠距離で交際を継続することに疲勞を覚え、鳩麦さんと半年もしないうちに別れるかもしれない。そして、さらに数年もすれば、鳥井や西島たちと過ごした学生時代を、「懐かしいなあ」「そんなこともあったなあ」と昔に観た映画と同じ程度の感覚で思い返すくらいになり、結局、僕たちはばらばらになる。

なんてことはまるでない、はずだ。

〔『砂漠』春(後半)〕(傍線論者)

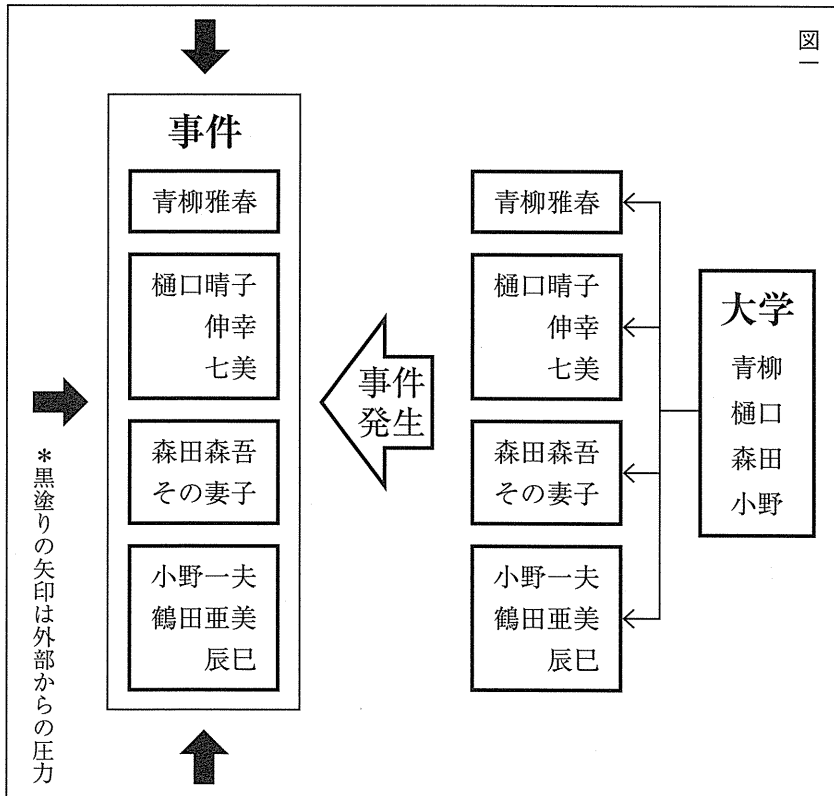
③は『砂漠』の最後の場面である。語り手である北村が卒業式の後、四年間を共に過ごした四人の友人や恋人を前にして決して良いとはいえない未来を予感する。そしてその予感を「なんてことはまるでない、はずだ」と打ち消す。この「なんてことは、まるでない」

という言葉は①、②で引用した大学入学直後の場面でも用いられている。①の「彼ら」は鳥井や西島を示すが、実際に物語中ではその後友情を深め、結果的に劇的な四年間を共に過ごすことになる。②は合同コンパの為に西島の服を見立てに行った際、ブティックで働いていた女性鳩麦と出会う場面であるが、その後鳩麦は北村の恋人として作中に度々登場する。結果として「なんてことは、まるでない」とされた予感はずべて実現しているのだ。

物語内で友人である鳥井から「鳥瞰型」と称され、自らを「さめている」と評価する北村が、ふと予感した未来を懸命に打ち消すように「なんてことはまるでない」と断定しつつも、「はずだ」と初めて念を押す姿は、自身の確信が初めて揺らぎ、「なんてこと」が起ころるのではないかと不安に駆られる北村の姿を描き出すと同時に、それが起ころる可能性を読者にほめかかしている。物語の性質上、『砂漠』の五人がどの様な関係性へと転じたかは定かではない。しかし、『ゴールデンランバー』における「事件」前の四人の姿は、北村が予感した未来に限りなく近いと言える。大学生であった時は大学という共通のコミュニティの中で多くの時間を共にしていたのに対して、四人は卒業から八年近く会っておらず、青柳と森田が再会したのは「金田首相暗殺」の陰謀という体外的な作用によるものであった。その陰謀が無ければ、もっと長い期間再会を果たさなかった可能性もあったのだ。

『ゴールデンランバー』の中で青柳、樋口、森田、小野はそれぞれが大学時代の回想をすること、そしてその内容からも、大学で築かれた関係性が決して稀薄なものではなかったことが読み取れる。しかしそれと同時に、大学というコミュニティを介した関係性

は、そのコミュニティを失った後、次第に稀薄になってしまっている。「学生時代」と「卒業後」というものは同じ時間軸上に存在しながら、それぞれが別々の空間に存在している、一種の「異世界」であるといえる(図一)。さらにその「異世界」は、それぞれの進



路に寄つてその空間、コミュニティが決定されていることで、「現在」はそれぞれ別の場所に存在した「別世界」になってしまふ。『砂漠』の五人は物語中で共通の「世界」で出会い、物語を展開していく。一方で『ゴールデンスランバー』の四人は、「事件」が発生したことによつて、結果的にそれぞれの「世界」から外圧的に共通する「世界」に集められ、時間もしくは空間、物語を共有することになったが、それまでは「大学」という共通の「世界」を脱し、それぞれの生活を「別世界」で送っていた。

つまり、『ゴールデンスランバー』の四人の関係性は、『砂漠』の五人の関係性の未来の姿となる可能性がある。それと同時に『砂漠』の五人の姿は、かつての『ゴールデンスランバー』の四人の姿であつたはずなのだ。

このように、『ゴールデンスランバー』は他の作品の蓄積と相互効果が顕著に現れている。しかし、それと同時に最も独立した作品であるとも言える。世界観、設定といったものは引き継いでいるが、前述した通り政治が土台の話でありながら伊坂幸太郎の小説に於ける政治的象徴の「犬養」という名前は一度も登場しない。『砂漠』に於ける大学生の「その後」を髣髴とさせる設定ではあるが、登場人物までは引き受けていない。『ゴールデンスランバー』以外の作品に見受けられるような、作品を超えて登場する人物や事象は存在しない。唯一作品を超えて登場するのは「田中」という名前と「足が悪い」という設定を共有しつつも、作品によつてその他の設定が全く異なるといふ特殊な人物のみである。このように他の作品では繰り返し登場する人物も事象も登場しない『ゴールデンスランバー』は、その物語の構成において他の作品の蓄積に大きな影響を受けつ

つも、他の作品が構築してきた「物語空間」からは独立した作品であると言ふことができる。

第二章 〈語り〉の構造

前述したとおり、『ゴールデンスランバー』に於いて、唯一作品の垣根を越えて登場するのが「田中」、本作に於いては田中徹である。田中徹は「第一部 事件のはじまり」で事件が提示されたあと、それを傍観する一般人として「第二部 事件の視聴者」での語りの視点人物となる。しかし青柳雅春やその周辺人物と接触することは殆どない。青柳雅春の逃亡を手助けした男、保土ヶ谷康志とは同室に入院しているが、保土ヶ谷康志が青柳雅春の逃亡を手助けしていることは知らないということを考慮すれば、完全に事件の第三者であり、直接的な関係はないと言える。ただテレビから情報を得て事の顛末を傍観するだけの「視聴者」にすぎない彼は、作中の「首相暗殺事件」に対する一般的な、最初こそ疑問を抱いていたが、結果として青柳雅春を犯人として疑われない人々の象徴的存在であり、その視点の代表者なのである。ここで読者は一度、事件を「メディア」を介して俯瞰した形となり、田中徹という一般市民の視線を通しての「事件」の概要を把握することが出来る。

この田中徹という登場人物は、フルネームが登場したのは『ゴールデンスランバー』が初めてであるが、「田中」という人物は伊坂のデビュー作である『オーデュボンの祈り』から、複数の作品に登場している^註。殆どの作品において一貫して「足が悪い」「足に怪我を負った」という設定で登場する人物である^註。しかし、名前と足が

不自由であることを除けば、作品によって年齢や職業、立場や性格、物語との関係性などは大きく異なる。伊坂幸太郎は作品をまたいで人物を登場させることが多々あるが、それはあくまで同じ人物が別の作品の登場人物、もしくは作品世界に関係性があり、そのつながりによって参加しているという態であるため、複数の作品に登場しつつも作品によって設定が異なるという登場人物は「田中」が唯一の存在である。

田中の「足が不自由」という設定、『ゴールデンスランバー』における田中の「足が不自由」という設定は、足を骨折したことで入院しているという形をとられている。

入院中で良かった、と思う。事件の経過の一部始終を満喫するには、これほど都合な状況もない。ありがとう、骨折。

〔第二部 事件の視聴者〕

このように書かれている通り、骨折という怪我で入院している田中は、時間と怪我を除けば健康な身体を持て余しており、それによって「事件」発生直後から三日間、事件のほとんどを傍観することが可能なのである。「足が不自由」という設定は本作に於いては彼が事件に注目する動機と機会を与える役割を果たしているといえる。このことによって読者は、彼の視点を通して作品世界内における「首相暗殺事件」についての一般的な報道の内容を余すところなく把握できるようにになっている。

それまでに「田中」が登場した作品を未読の読者に対しては、田中徹という登場人物は「事件の視聴者」であり、作中の一般人の代表者という以上の役割は示されない。しかし、他の登場作品を読み「足の悪い田中という男」という知識の蓄積がある読者にとっては、

「事件の視聴者」である以上に「伊坂作品における田中」という固定の位置を得ることになる。田中の設定や立場は作品によって大きく変化するため、彼の存在だけでは直接物語に大きな影響をもたらすことはない。しかし、名前と「足が不自由」という記号だけで自由に使用可能な人物であり、その存在こそが特定の読者に対してのみ効果を発する「記号」なのである。そしてその「記号」としての存在を知っている読者の親近感や興味をあおり、作品へと引き込む材料となるのである。つまり、第二部に「田中徹」が登場するということは事件の概要を読者に提示する役割と、その「記号」としての役割の二つを持って、読者を物語に引き込む効果を持っているのである。

第二節 「第三部 事件の二十年後」

『ゴールデンスランバー』における物語の構成において特徴的であり、それ以前の作品と一線を画す部分のひとつに「全てを語らない」ことがある。それまで、伊坂作品の多くは所謂「どんでん返し」で落ちをつけることで物語の全容を読者に提示する終わり方を採用してきた。主要登場人物が巻き込まれた事件の全容が浮かび上がる、真犯人が発覚する、真犯人が罰せられる、もしくは何らかの形で事件が収束する、といった物語における典型的な着地点が用意されてきた。しかし、本作においては青柳雅春が犯人ではないこと、青柳雅春が逃げ切ったことは明示されているが、真犯人が誰であったか、目的は何であったか、真犯人の末路はどうなったのか、といったことは一切明らかにされていない。ただその存在が「相当、でか

い奴ら」(第四部)であることだけが読者に提示される。しかし、ただ曖昧に終わらせるわけではなく、青柳雅春と樋口晴子の語りだけでは充足されない情報を埋め、読者の疑問に答えるかのように用意されたのが「第三部 事件の二十年後」であり、「第五部 事件から三ヵ月後」であると言える。

第三部で「一介のノンフィクションライター」が書いたとされる調査書では、事件の裏にあるとされた様々な人間関係や事件の経過などを「二十年前の事件」として読者に提示することで、現代における「ジョン・F・ケネディ大統領暗殺事件」の認識と重ねている。ここでは事件が二十年経っても多くの人に記憶されている大きく衝撃的な事件であったことや、実しやかにささやかれる陰謀説、さらには「二十年が経過した今も明らかにならない」(第三部)といった、世間の事実を並べている。これは現代に於ける我々の「ジョン・F・ケネディ大統領暗殺事件」の認識と類似しており、読者にその事件を髣髴とさせると同時に、その内容を読者が「第四部 事件」で事件の内容と照らし合わせることも可能となっている。調査書の内容は物語世界における「世間」が認知している程度の事件にまつわる情報と「一介のノンフィクションライター」の調査に基づいた意見でしかないが、「第四部 事件」を読み進めるにつれて、その情報や意見は物語としてのつながりを生じてくるのである。

さらにここには複数回読む読者へのトリックが仕組まれている。①筆者は昔、若者たちが、「世の中の悪いこと全部が、自分たちのせいになる。アメリカみたいだ」と嘆いていたのを聞いたことがあるが、まさにアメリカとはそういう宿命にあるのかもれない。

(「第二部 事件から二十年後」)

②「俺たちなんて、いつもやってねえことをやった、って言われてるんだ」

「すげえ、分かるよ、その気持ち。濡れ衣ほどつらいものはねえよなあ」

「悪いことが起きると何でも俺たちのせいだぜ。アメリカみたいだよな」

(「第四部 事件」)

引用のうち、前者は「一介のノンフィクションライター」が書いたとされる調査書であり、②は青柳雅春が逃走中に遭遇した、青柳を無実だと信じる五人組の若者の台詞である。この二つは非常に類似しており、①の「若者たち」が②の五人組であると読むことが可能である。そして、そうであるとすれば、その「若者たち」と出会ったとする「一介のノンフィクションライター」が整形後の青柳雅春である可能性を読者に提示している。

このように、さまざまな人間の口が閉ざされた今、真相については推測するほかなく、せいぜいが、「青柳家之墓」と刻まれた墓石に手を合わせ、「何があったのですか」と訊ねることくらいしかできない。筆者は現実はこの調査原稿を書く前に、森の中にある霊園に足を運び、手を合わせてきた。もちろん、答えは得られず、そこでは森の声も聞こえなかった。

(「第二部 事件から二十年後」)

また、ここでは訪ねた墓について「森の中にある霊園」としており、直接的に「青柳雅春の墓」とはしていない。またあえて、文章中で「青柳家之墓」とすることで青柳雅春の死を匂わせつつも、青柳雅春がすでに亡くなっているという表現は巧みに避けている。「青柳家之墓」は文字通り「青柳家」の墓であり、青柳雅春が亡くなっ

ていなくても、事実として存在するのである。さらにこの調書には第五部に記された青柳雅春の「死体が仙台港で発見された」(第五部)という警察の発表についても一切触れていない。あえて訪れた墓の話の直前に「青柳家之墓」の例えを提示することで、「一介のノンフィクションライター」による調査書の読者に対してミスリードを試みている。しかし、「森の中の霊園」「森の声も聞こえなかった」とあることから、「第四部 事件」を読んだ読者には森田森吾を彷彿とさせ、その墓を訪れる青柳雅春の姿を彷彿とさせる仕組みがなされている。またこの「一介のノンフィクションライター」が青柳雅春であるとすれば、「事件から二十年後」とされることで、二十年経っても明らかにされたことが数少なく、それを長年追ってきた姿を浮かび上がらせる。

また、青柳雅春を追うことに全神経を注いだため、疲弊した、という話もあれば、佐々木一太郎は整形手術を施し、まったく別の人間を装い、今も、金田貞義暗殺事件の真相を追っている、という説もある。

〔第二部 事件から二十年後〕
佐々木一太郎の事件後の動向に対する噂を調査書に記しているが、「二介のノンフィクションライター」が青柳雅春なのであるとすれば、ここで佐々木一太郎として書かれているのは、実際には青柳雅春自身の姿そのものである。

「金田が来るんだよな。パレード」
「見たかったか？」

「いや、特に関心ないよ」青柳雅春は正直に答える。テレビで見かける金田という政治家に、それなりの興味はあったが、混雑の中、姿を拝みに行きたいほどではなかった。首相選の投票

にも、投票日を忘れていて、行かなかったくらいだ。

〔第四部 事件〕

青柳雅春は「事件」が発生するまでは政治にも、金田貞義自体にもそれほど大きな関心を寄せている人物ではなかった。しかし「事件」に巻き込まれてから二十年間、「事件」に関係する政治的背景を調べ、学び、取材を尽くしてきた。言い換えれば、事件さえなければ「青柳雅春」という人間がそれほど大きく政治に興味を示すこともなく、更には「事件」の犯人として追われることがなければ、「事件」に対しても、政治に対してもここまでして取材することもなかった。おそらく、自分自身以外の人間が犯人に仕立て上げられていたのであれば、青柳雅春は「事件の視聴者」として描かれる田中徹とそれほど変わらない程度の関心しか抱かなかったであろう。「事件」の犯人とされたこと、それこそが青柳雅春を「政治と取材」に導いたエネルギーであったのだ。青柳雅春と同様に樋口晴子も「第一部」ではそれほど「首相凱旋」に関心を抱いておらず、テレビで「事件」を目撃した後も、「事件」そのものよりも、それによって影響が出るであろう自分や家族の生活などを気にかける程度で、「事件」にはあまり関心が無いように見受けられる。しかし、彼女もまた犯人が青柳雅春であると報道されていることを知り、「事件」に巻き込まれたことよって初めて「事件」へ大きな関心をよせ、その段階で警察に不信感を抱きはじめていたのである。

聴衆の多くは当事者にされるまで、何が起きようと他人事である。しかし、青柳雅春や樋口晴子という人物の境遇はきつかけさえあれば、現実には誰もが陥り得る、いくらでも取替えの可能な立場である。「青柳雅春」「樋口晴子」と「田中徹」という登場人物そのものが、

現代に於ける大衆のメタファーであると言える。第三部は前述した効果やトリックと同時に、傍観者に徹する聴衆心理もアイロニカルに描かれた部であることが窺える。

結論

『ゴールデンスランバー』は独立した一つの作品でありながら、同時に他の伊坂幸太郎作品とのテーマ、象徴、人物などの共有によって作品間の相互効果をもたらしている。これによって物語の主軸とは別の部分で、作品として奥行を持つ仕組みとなっている。また、物語は「首相暗殺事件」を中心に青柳雅春の逃亡が描かれているが、これを反復的に様々な視点から語られていることによって、読者は同じ事件を多角的な角度から把握することが可能である。特に事件そのものとは全く関わりがない、第三者である「視聴者」の視点、事件を二〇年前の物として振り返る形で語る「一介のノンフィクションライター」の視点が用いられていることで、読者は事件には関わりがない「一般的」な意見も窺い知ることができる。これは同時に誰もがそれぞれの視点人物と同じ立場に陥る可能性がある、いくらでも交換可能な立場であることを読者に提示するメタファーともなっているのである。

『ゴールデンスランバー』に描かれたのは冤罪からの逃亡の物語であると同時に、それぞれの立場、名前や容姿という記号、さらには外圧的な力にかかれれば犯罪の犯人でさえ「交換可能」のものであるということである。作中の世界では情報化社会としてメディアとセキュリティシステムである「セキュリティポッド」が日常化し、

民衆はそれらに大きな信頼を寄せている。しかし、「ケネディ大統領暗殺」から五〇年近い月日が経った小説的現在においても同じような事件が起こり、さらに二〇年経つてもすべてが明らかにされていないことから、メディアの発展が必ずしも物事の真実を伝えるものではなく、むしろ偽の証拠が次々に提示されるなど情報操作とその拡散が容易になってしまった様子が窺える。それによって、誰もが自分の意思とは関係のない場所での「犯人」に、「関係者」に、そして「視聴者」になり得るのである。それは第五部の視点人物である鎌田晶太のように気付かないうちに発生し、関わり、収束している場合さえあるのだ。それに加え、メディアの情報発信によって国民感情までもが左右されてしまう危うさは、現実の情報化社会へのアイロニーとなっている。

本作は、伊坂幸太郎がそれまでの自身の作品や趣向を用いつつ、情報化社会における「情報」の危うさ、監視社会になりつつある現代の民衆の無関心さ、そして冤罪といった現代的な問題が多く題材に組み込まれており、誰もが青柳雅春の立場へと陥りかねない現代社会をアイロニカルに描いた作品であるといえる。

【註釈】

- (一) 青柳雅春は堺雅人、樋口晴子は竹内結子、森田森吾は吉岡秀隆、小野一夫は劇団ひとり、三浦(キルオ)は濱田岳が演じた。
- (二) 『オーデュボンの祈り』『陽気なギャングが地球を回す』『陽気なギャングと日常と襲撃』『グラスホッパー』『魔王』『オー！ファーザー』、さらには『ゴールデンスランバー』以降の作品である、『SOSの猿』に登場している。

(三) 『SOSの猿』では田中徹として名前を共通点に登場するが、他の作品のような足の設定は引き継がれていない

【参考文献目録】

【テキスト】

『ゴールデンランバー』二〇〇七年十一月三〇日 新潮社
『ゴールデンランバー』（文庫版）二〇一〇年十二月一日 新潮社

【伊坂幸太郎著書】

『オーデュボンの祈り』（文庫版）二〇〇三年十二月一日 新潮社
『ラッシュユライフ』二〇〇二年七月三〇日 新潮社
『陽気なギャングが地球を回す』二〇〇三年二月二〇日 祥伝社
『重力ピエロ』二〇〇三年四月二〇日 新潮社
『アヒルと鴨のコインロッカー』二〇〇三年十一月二十五日 東京創元社
『グラスホッパー』二〇〇四年七月三〇日 角川書店
『魔王』二〇〇五年一月二〇日 講談社
『砂漠』二〇〇五年十二月十五日 実業之日本社
『陽気なギャングの日常と襲撃』二〇〇六年五月二〇日 祥伝社
『フィッシュストーリー』二〇〇七年一月三〇日 新潮社
『モダンタイムス』二〇〇八年一月十六日 講談社
『SOSの猿』二〇〇九年十一月二十五日 中央公論社
『オー！ファーザー』二〇一〇年三月二十五日 新潮社
『バイバイ、ブラックバード』二〇一〇年七月四日 双葉社
『リアアビートル』二〇一〇年九月二十四日 角川書店
【PK】二〇一二年三月七日 講談社
『夜の国のクーバー』二〇一二年五月三〇日 東京創元社

【参考文献】

広田寛治『ザ・ビートルズ大全』

二〇〇四年十二月三〇日 河出書房新社

梨本敬法（編）『洋泉社MOOK 伊坂幸太郎 WORLD&LOVE』

二〇一〇年一月十七日 洋泉社

坂上陽子（編）『KAWADE 夢ムック 総特集伊坂幸太郎』

二〇一〇年十一月三〇日 河出書房新社

井上裕務（編）『洋泉社MOOK 伊坂幸太郎全小説ガイドブック』

二〇一一年五月一五日 洋泉社

*尚、論文中の引用は全て『ゴールデンランバー』単行本版に基づく